美術科教育学会通信 No.62

２００６年 12 月 26 日発行

通信事務　代表：〒 772-8502　鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地
鳴門教育大学芸術系（美術）講座　橋本泰幸研究室／ Tel. & Fax. 088-687-6481 ／ E-mail：hasimoto@naruto-u.ac.jp
企画・編集：山木朝彦／ Tel. & Fax. 088-687-6485 ／ E-mail：yamaki@naruto-u.ac.jp
編集レイアウト：山田芳明／ Tel. & Fax. 088-687-6636 ／ E-mail：yyamada@naruto-u.ac.jp
企画協力：山田一美（東京学芸大学）　WEB 版：谷口幹也（九州女子大学）

図画工作・美術の教育力を揺ぎないものに

美術科教育学会代表理事　橋本泰幸（鳴門教育大学）

11 月 16 日，教育基本法改正案は衆議院における採決を終え，参議院での審議に入りました。

教育基本法は 1947 年 3 月に公布され，以来，学校教育は，国民主権，基本的人権の尊重，平和主義を原則とする日本国憲法（1946.11 公布）と，そこに示された三大原則を具体化した教育基本法とによって，自ら考え，判断する子どもを育てる教育へと大転換し今日に至っています。この間，日本の発展は目覚しく，瞬く間に経済大国となります。しかしその発展は同時に，科学技術の進歩，情報化，国際化，少子高齢化などと連動し，我が国の教育をめぐる状況を大きく変化させ，昨今の「いじめ」をはじめ，様々な課題を生じさせてきました。このような状況から，教育の根本にさかのぼった改革が必要であるとして，今回の教育基本法改正が提起されました。

しかし，一方で，教育基本法の改正は，教育の場に競争と格差をもたらし，子どもたちをますます深刻な状況に追いやるのではないか，また「国を愛する態度を養う」ことが，学校教育のみならず家庭や社会など，すべての教育分野で求められ，教育は国家にとって都合のいい国民をつくる道具になるのではないかなど，批判の声も聞きます。

美術科教育学会は昨年 11 月に文部科学省に請願書を出しました。その中で，美術教育は人間・社会・環境の三者について学び，それらを結びつける基礎的な「知」であり，現代社会にとって必要不可欠な学と認識されていること，この観点に立って，美術教育の充実こそが我が国の教育にとって重要な課題であり，美術教育が一貫して目標に掲げてきた，個性や創造性，そして情操の陶冶，人格形成を支える重要な教科であることを訴えました。改定に関わる危惧を一掃するものではないのですが，このような時だからこそ，美術教育の必要性が鮮明に浮かび上がるような気がします。

教育基本法の改定の動きは，必ずや学習指導要領に反映することでしょう。私たちは図工・美術科教育の内容や授業時数の増減に一喜一憂することなく，子どもたちの健全な成長のために，図工・美術科教育が学校教育の中で大きな力を持つこと，とくに，子どもたちが抱える，心に係わる教育課題に応えることが出来る教科であるとの認識の下に，図工・美術の教育力が確かなものであることを示す研究成果をだすことが必要と思います。

（次頁に，３月開催の金沢大会第二次案内があります。）

第 29 回美術科教育学会 金沢大会【第 2 次案内】

美術科教育学会 金沢大会事務局代表　鷲山　靖（金沢大学）

金沢大会は 3 月 25 日（日），26 日（月）に金沢大学教育学部で開催いたします。

大会テーマは「美術教育研究の不易と流行」です。近年の大会テーマに掲げられた「危機」(19，20 回)，「越境」(22 回)，「更新」(27 回)，「変革」(28 回）といった時代のうねりは，新たなうねりを伴って絶えず私たちに打ち寄せています。新たなうねりの波頭が視野に入った今，「不易と流行」の観点より，私たちの美術教育研究と学会を捉え，更なる美術教育の学的確立とその深化を追求する金沢大会にします。**学会の原点を大切にします。**口頭発表の申込と発表概要原稿提出の締切日をできる限り大会開催日に近付けました。奮ってご発表下さい。

どうぞ，早春の金沢においで下さい。皆様のご参加をお待ち申し上げます。

■**会期**：**平成１９（2007）年３月２５日（日）～２６日（月）**

■**会場**：**金沢大学教育学部**（JR 金沢駅東口 93,94,97 番バス乗車，「金沢大学」バス停下車）

■**大会テーマ**：「美術教育研究の不易と流行」

■**日程（予定）**：3 月 25 日（日）午前（受付，開会行事，研究発表），午後（研究発表，懇親会）
3 月 26 日（月）午前（総会，シンポジウム），午後（研究発表）

■**研究発表申込**：同封の案内書一式をご覧下さい。
http://www.ed.kanazawa-u.ac.jp/~washi/　からもご覧になれます。

・**申込方法**：申込書，返信用封筒（長形 3 号，２枚），返信用ハガキ（１枚）を下記宛に郵送。

・返信用封筒（2 枚）は，長形 3 号をお願いいたします。第一次案内では，角形 2 号とお知らせいたしましたが，訂正いたします。長形 3 号を送付いただきますようお願いいたします。

・**申込締切日**：平成 19（2007）年 2 月 2 日（金）必着

・**郵送先**：〒 920-1192　金沢市角間町　金沢大学教育学部美術教室
第 29 回美術科教育学会金沢大会事務局　鷲山靖

■**参加申し込み方法**

同封の「郵便振替払込票」にて，参加申し込み及び参加費・懇親会費の払い込みをお願いします。必要事項（用紙が不足する場合は同内容）をご記入の上，お振込下さい。

・**口座番号**：00780-2-94067　　・**口座加入者**：美術科教育学会金沢大会事務局

・**通信欄**：振込金額内訳□にレ印を，所属，住所，氏名（フリガナ）をご記入下さい。

・**参加申し込み期限**：**3 月 15 日（木）**

当日受付も行いますが，**大会運営上，できるだけ事前にお申し込み下さい。**

また，3 月 15 日以降は口座に振り込まず，当日，受付にてお支払い下さい。

■**情報交換の場**：会場に展示コーナーを設けます。会員の出版物や情報発信に，ご希望の方は 1 月末までに開催事務局へご相談下さい。法人は有料とさせていただきます。

■**宿泊等**：事務局では扱いませんが，大学生協で紹介します。同封の別紙案内書をご覧下さい。

※連絡・問合せ先　E-mail washi@ed.kanazawa-u.ac.jp（鷲山）
TEL 076-264-5584（鷲山）
※ 電話による連絡・お問い合わせはできる限りご遠慮ください。

報告　第13回東地区会＜シンポジウムin福島＞

日　時：2006年10月7日（土）
会　場：福島文化センター
テーマ「地域文化と現代美術」

2006年10月7日，福島県文化センターにおいて「地域文化と現代美術」と題したシンポジウムが開催された。小説家や詩人，ダンサーなど，幅広い芸術領域の専門家をパネラーにお迎えし，福島という一地方において，いかに美術を通した文化活動を展開できるかを話し合うこととなった。なお本シンポジウムは「福島現代美術ビエンナーレ2006」の実行委員によって企画運営されたのである。「福島現代美術ビンナーレ」は福島大学が教育学部から人間発達文化学類に改組した2004年に，絵画研究室の学生，院生が中心となって始動した。今年度は福島文化振興事業団が参画し，県内の美術館，博物館の学芸員や大学関係者も理事として加わった。また今年度は「空」をテーマに，靉嘔や加納光於，吉田重信をはじめ，ドイツ，メキシコ，バングラデッシュなど，国内外から150名以上の美術家が参加した。会場も街なかの商店街，文化施設へと広がり，美術展やワークショップ，パフォーマンスなどのイベントを，地域住民と一緒になって盛りあげる大規模な「美術の祭典」となった。

シンポジウムは今年度，宮脇　理博士をアドバイザーにお迎えし，以下の4名のパネラーが話題提起を行なった（以下，パネラーの紹介と話題提起された主な内容）。

佐垣慶多氏（福島大学大学院生。第56回モダンアート展協会賞受賞者）は，マンダラのもつ「部分と全体」との関わりから自身の制作背景を語り，作品の鮮度や「自己」を見つめ，価値を与えるうえで，いかに他者の視点が重要であるかを提起した。

中村文則氏（小説家。第133回芥川賞受賞者）は，ブルトンの絵画『カラスのいる風景』を自身の小説に置換した事例等を通して，時代の中で生まれてくる芸術は，土地の風土や他の芸術活動とも密接な関係があり，何らかの形で芸術に投影されていることを語った。

平山素子氏（コンテンポラリーダンサー，振付家。現在，筑波大学講師。1999年 世界バレエ＆モダンダンスコンクールにて金メダル，ニジンスキー賞受賞者）は，コンテンポラリーという言葉で括られる芸術作品の背景とその問題点について，現代のダンスと重ねながら語った。また新国立劇場が若いアーティストを育成する目的で企画したJバレエや，メディアが扱うアーティストの現況を伝え，現代の芸術活動における重要なキーワードをいくつか紹介した。

和合亮一氏（詩人。福島大学大学院修了。福島西高校教諭（国語）。第4回中原中也賞受賞ほか）は，自身が学生時代，いかに詩や演劇と関わったかを伝え，そこからパフォーマンスを含めた「現代美術の祭典」を福島で開催することの意義をまとめた。また地方でメディアを自分たちで作る意気込みを持つことの重要性について，様々な事例をもとに語った。

通して，現代の「地域文化」における問題点を，本シンポジウムでは，互いの芸術活動に対する共通理解を深めるなかで多数の意見交換がなされた。また宮脇博士にアドバイスを頂き，会場の参加者とともに，次代を担う芸術活動や芸術教育に期待される課題を受け取ることができた。

なお本シンポジウムは『福島現代美術ビエンナーレ2006』の図録集に記載するとともに，詳細は『福島大学地域創造』第18巻第2号に掲載される予定である。（渡邊晃一，福島大学）

提言

教員養成系大学における実技授業のあり方

井坂健一郎（山梨大学）

「先生，これでいいですか？」，「どうしたらいいですか？」という発言が，大学での実技授業においても聞こえてきます。過日，教員免許法認定講習会の講師を務めましたが，ここでも現職の小学校教員から同様の声があがりました。このことは，小中学校の現場で，児童，生徒からも授業中にあがる発言でしょう。私の願望ですが，図画工作や美術の授業において，できるだけこのような声があがる場面を少なくしたいと思うのです。

私自身が担当している大学の実技授業での工夫に基づいて，ひとつの提言をしたいと思います。私が担当している実技授業は，「絵画基礎表現」，「絵画応用表現」，「造形計画演習」等です。私が勤務している大学では，半期で 15 回の授業により，1 科目が完結するように設定されています。ここで少し詳しく紹介しますと，「絵画基礎表現」と「絵画応用表現」では，それぞれの科目において２つずつの課題制作を設けています。課題のひとつは，教員が教室（アトリエ）内にセットしたモチーフを自由に表現するという課題を与え，もうひとつの課題では，教員が用意したさまざまな参考資料から学生がイメージを膨らませ，自由に画面構成をして，より多様な絵画表現を考えるという課題を設定しています。また，これらの授業では試験やレポートを課す代わりに，授業の 15 回目であり，大学では試験期間にあたる時に講評会を行っています。それは，半期に制作した２枚の作品をアトリエ内に並べ，それらの作品を前にしながらディスカッションを行うという機会にしています。この際，教員が一方的に学生の作品を講評するのではなく，学生個々に制作意図を語らせ，作者本人をはじめ授業を受けている他の学生も交えた対話を中心にしながら作品を鑑賞していくことを徹底しています。

実技系の授業は，ただ描けばよい，つくればよいというものではなく，論理的にも造形という問題をとらえるという学習が必要であると私は考えています。また，自己の作品を他者にもわかるように説明する力も不可欠でしょう。特に教員養成を目的とする実技の授業ならば，そのことは軽視できません。私の授業では，学生個々の作品をもとに「対話する造形」を大事にしながら美術教育を楽しんで考えていくようなことを心がけています。

上記にあげた私の担当科目の中で，「造形計画演習」という授業があります。この授業では，まさに学生自身が問題提起をし，それを解決していく方法を「美術」という枠組みを超えたところで考えていくようにしています。「美術」を超えたところで身のまわりの物事を取材し，そこで感じたことや，考えたことを文章も含めてスケッチブックやファイルにまとめていくということを繰り返し行います。これは、答えを見つけて，それを「美術」に結びつけるということが目的ではありません。「美術」がただ単に「絵を描く」とか「ものをつくる」ということではなく、「生きている自分を確認できるもの」のひとつであるということと，「美術」が，すべての人間には持ち得ていないものであっても，「美」はさまざまな形で人間の心に存在するものだということを学生に感じてもらいたいと思っています。そのような目的が，教員養成系大学の実技授業において強調されてもよいのではないでしょうか。

研究紹介

Ａ．Ｅ．ＮＥＴと附属中学校の研究成果

木村典之（大分大学教育福祉科学部附属中学校）

「美術って副教科やろ。何のために（美術）やるの？」「美術は息抜きだから･･･。」これらは，附属中学校赴任時に生徒から発せられた言葉です。この言葉は，生徒自身の考えと言うよりも，家庭での親の子会話を再現したものと捉えられます。「家に持ち帰った作品が，親から捨てられた」という事実がそれを裏付けます。こうした生徒は，「先生にこれあげるよ･･」と言って，作品を持って帰ろうとしない事もしばしばです。家庭で子どもの制作した美術作品が大事にされていない事例です。一部ではあるのですが，こうした空気は，附属中学校の根底に流れている気がします。なにより，５教科が大事で美術は余暇です。教養を高めるために・・という高尚な考えの家庭はごくまれです。むしろ，「内申点に響くから頑張りなさい」と親に言われている生徒もかなりいます。美術の学習の動機が内申点にあるのです。

こうした考え方とたたかうのは，かなり骨のいる作業です。あえて目標を掲げるなら，「これ絶対捨てないでね」と，子どもに言わせるか，「すごい！いいもの持って帰ったね。飾っておこうね」と親に言わせるか，のどちらかでしょう。前者は，子どもに，親の価値観を覆すだけの強い美意識を獲得させることが必要です。後者は，親の受けた美術教育を想定し，その価値観の中で納得させることです。これは，簡単に言えば上手いか下手かです。上達すれば，保護者は納得するようです。このように，美術や美術教育と関係の薄い方々との関係を作っていくことが，私の研究のベースです。この関係作りを具体化した実践を，「Ａ．Ｅ．ＮＥＴの活動」と「附属の研究」の２つの角度から紹介致します。

◆Ａ．Ｅ．ＮＥＴの活動から

Ａ．Ｅ．ＮＥＴ（ART EDUCATION NETWORK）は，1996 年，大分にて始動した小さな美術教育研究サークルです。当時 20 才代後半から 30 才台前半の若手の美術教師で構成されたものでした。このサークルの出発は，大分県造形教育研究会という大きな組織の硬直した研究体勢への反骨精神と，美術や美術教育の話ができる研究会が欲しいという素朴な願いが原点です。このサークルを発起するときに研究面での指導と有形無形の援助をして下さったのが山木朝彦先生（現鳴門教育大学）です。

それ以降，このサークルは月に１度集まって，授業の「ネタ」を探し続けています。そして，教材開発，追試，模擬授業，議論，情報交換，情報発信とネットワーク作りなど行ってきています。ホームページの運営は，発起人の一人佐藤　誠氏（現大分市立大在中学校）が行っています。その後，大分市の図画工作鑑賞研究サークル‘ゼロ’と合同研究会を行ったり，大分県造形教育研究会の研修部とリンクし教材開発を行ったりなど，その活動は地域に広がりました。参加される方も中学校美術教師を中心としながらも，小学校図工教諭との連携にも力を入れ，2004 年度からは，年に１度，小中一貫造形美術教育研究をテーマに子ども造形美術教室を行っています。題材開発のキーワードは「飾れるもの」「使えるもの」で，持ち帰ったときに，保護者も一緒になって喜ぶことのできる作品作りです。対象は小学校４，５，６年生です。１年目

は「きらきらスクラッチ」, 2年目は「私だけのレインスティック」, 本年度は「おさかなクッション」でした。この活動は3年目ですが，年々応募者が増え，2年目以降定員（40人）を大幅に上回るようになりました。昨年も今年度も受付開始2時間で応募打ち切りとなるなど，好評をいただいております。この研究は，小学校と中学校と大学の教員が協働で題材開発をしている点と美術教育に関する保護者への啓発までも視野に入れた取り組みである点の2点において大きな意味を持ちました。

◆附属中学校の研究から

（1）ふれる・語る・みる学習（学習過程の研究）

本校美術科では，学習スタイルと学習過程の研究を行っています。従来の制作し鑑賞するという学習過程ではなく，「触れること」「見ること」「語ること」を繰り返すことによって，作品や素材，行為や表現などについて感じたことを言語化させます。この言語化の作業を協働で行うことで主題の深めさせます。学習過程では，多様な見方・感じ方を，教室に広げます。そうすることで学習者は，自分とは違う価値観に出会う事ができます。さらに，3年間の学習のゴールに,「(自分にとって) 美術とは何か」を語る会を設定しています。これは, 先に述べた「何のために美術の学習があるのか」という問いの答えを得るためです。美術の役割と美術の魅力について，自分の言葉で語れるようになることを3年間の美術学習の目標にします。(関連する研究 :「体性感覚を培う美術教育実践の報告～ふれる・語る・みる学習の重要性～」大学美術教育学会　静岡大会口頭発表 2000年,「‘みる’を深める美術科教育指導法の研究」大学美術教育学会　岡山大会口頭発表　2005年)

（2）触覚教材の開発と「愛着」

黒陶を使った触覚教材「私の心の内と外」を開発しました。黒陶は，土を磨き，低温で焼きながら炭素を吸着させる技法です。原始的な技法であるが故，造形の本質に迫る力強さがあります。磨きの工程では，粘り強さや集中力に比例して土の表面に光沢が出るので，中学生の制作に向かう基本的な態度を育成することに役立ちます。「私の心の内と外」という主題で，作品の内側と外側に夢や希望を刻み，作品の内部に仕込んだ「なりたい私」と「消したい私」をドラム缶窯で焼成することによって昇華させるというコンセプトです。(関連する研究 :「‘対話’を生み出すための触覚教材の研究」 美術科教育学会　京都大会口頭発表　2006年.3月,「中学校美術科における黒陶教材の導入」大学美術教育学会誌38号 [15，16年度科学研究費奨励研究の成果発表])

これらの学習のメリットは，五感を駆使したり言語化したりする行為によって，作品と作者との関わりが強化され，その結果として，自分の作品に対する愛着心が深まり，作品を大事にするようになることです。このような指導をすれば, 作品を持ち帰っても, 生徒が親に対して「絶対捨てないで」と言います。また，体験的な活動と語る活動によって，美術批評力育成の手がかりを得ることもできます。作品について語ることは，作品の価値や意味を考えたり，それを伝え合ったりするうえでとても重要なものだと私は考えています。

Books 新刊紹介 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

宮脇　理 監修，山口喜雄・天形　健 編集

『ベーシック造形技法―図画工作・美術の基礎的表現と鑑賞』

建帛社，2006 年 10 月出版　ISBN4-7679-2086-8 定価 2415 円（税を含む）

宮脇　理（元筑波大学教授・現在 : 華東師範大学顧問教授）

＊＊

本書は 38 人による " 協働 " の仕事である。技法に眼を向ける時，想い起こすのは，レイモンド・ローウィ（Raymond Loewy，1893 ～ 1986），花森安治（はなもり・やすじ，1911 ～ 1978），そしてミヒャエル・エンデ（Michael Ende，1929 ～ 1995）の三人である。ローウィと云えば『口紅から機関車』であり，「美しき良きデザインは機能に沿ったもので，コスト高をきたすものではない」の徹底した機能主義の立場は，ル・コルビュジエにも通じる 1930 年代のデザイン志向だが，一般には大恐慌とニューディール政策に結びつけられる無駄な装飾を排除し，単純な色彩を用いた製品こそ美しく，低コストな製品を産み出すという技術・技法から消費理論へと連動する。

つづく花森安治 * は『暮しの手帖』，それ以前の『< 一銭五厘の旗 >』で知られている。(* 東京帝国大学文学部美学美術史学科：1933 年入学）　花森が 66 歳で没するまで《 ぼくらの暮しと企業の利益とが　ぶつかったら　企業を倒す　ということだ 》を標榜した「暮しの手帖」には，一切の広告を載せず，何ものにも縛られずに商品テストの報告記事が書かれているが，広告排除のステージから生まれた生産から消費への眼差しには，オネスティな技術とは何か？技法とは何か？の示唆が溢れている。

三人目のエンデは，過去から未来を視る，探るのではなく，“ ミライ ” から逆に “ イマ ” を見据え，そこ (イマ：現在) から “ 未来 ” を予測させる。コノ往還の眼差しは『ベーシック造形技法』のステージへの確かの指針として映る，そして，写るのである。

さて，本書の “ まえがき ” には次のように書いた。＜私たちは知らず知らずのうちに眼前の現状にのみ眼を向け，材料の生成を等閑視し，そうすることで進歩の概念を創り上げてきたのである。理由は媒体の生成・因果関係などを知らずとも日常生活には困らないからであり，結果は過去・現在・未来を連動させ，俯瞰することで現在を焦点化する能力を失っている・・＞と。

いま，この国の教育界は「競い合う気持ちが出発点」，「世界のトップレベル」への眼差しと志向に溢れているが，これは “OECD”(ORGANISATION FOR ECONOMIC CO-OPERATION AND DEVELOPMENT：経済協力開発機構) による 2000 年と 2003 年の比較調査と，理数教育に比重を置く “IEA”（国際教育到達度評価学会) による国際順位の凋落が原因であり，明らかに世界のトップを飾ったフィンランドを念頭に置いていることは確かである。しかしフィンランドが頂点の座を得た理由を推量すれば，143 年前の 1863 年，“ フィンランド教育の父 ” といわれるウノ・シグネウス (Uno Cygnaeus) が “ 民衆芸術 ” を教育の基底媒体に置き，手渡す教育として “ つくる教育 ” を生み出し，単なる知識の集積を彼岸とした心と身体を練り合わせた知による歴史的遺産，つまり “ 果実 ” が現在へと結果していることに眼を向けたい。さて本書の企画は三つの段階を踏んでいる。

第一段階は 37 年前の 1969 年に「造形社」より『造形ハンドブック』Ⅰ＆Ⅱを刊行。第二段階は “ 建帛社 ” より『造形の基礎技法』として 1984 年に出版。今回の第三段階が 37 年の歴史を抱えその継続と進展を意図して企画したのである。この間, 多くの “ 変動 ” に出会ったが, 手渡す技法から “ICT” までの技法を併走させること，創造的にして持続的，そして地域に連動する未来へ向かう “ 生きている造形の基礎技法 ” を試みた。“ 本書は 38 人の「コラボレーション」である ”。

文献解題　学術文献の紹介と解説　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

若桑みどり著

『イメージを読む　—美術史入門—』

筑摩書房，初版 1993 年
（現在，筑摩書房から文庫版の形態で出版されています。文庫版 ISBN4-4800-8907-1）

和田咲子（大塚国際美術館学芸員）

＊＊＊

若桑みどり氏は，イタリアバロック絵画の創始者カラヴァッジョの研究をはじめ，マニエリスム芸術を日本で初めて紹介し，その他にも超領域的にわたるイメージ研究をおこない，多数の著書をもつ美術史家である。なかでもイメージというメディアの使い方や読み解き方を，より分かり易く解説する本書は，専門的になりがちな美術史学の方法論を広く紹介する一冊である。

現在では，より一般的な美術書においても，図像学や図像解釈学の方法論を用いてイメージを読み解いている解説を探すことは難しくない。しかし，約十四年前に世にでた本書は，未だ専門家的な知識としての認識しかなかった，この「描かれたイメージを読み，そこに表された意味を知る」方法を紹介する貴重な一冊であったし，今でも十五刷を重ねる美術史入門書である。

本書の内容は，著者が国立大学でおこなった集中講義において，生まれて初めて美術史と出会う学生に対しておこなった講義を収めた記録である。そこでは歴史学，文化人類学，考古学，宗教学，神話学，経済学，文献学など，超領域的な分野から資料調査し，明らかになった事実に基づきイメージを解読する，美術史の方法論と実践例を紹介している。また本文の中で若桑氏は，「美術鑑賞は理屈ではない。自分が良いと思えばそれでたくさんだ。」という，感性主義的鑑賞者の反論についても，「事実についての知識は，感受性を深めこそすれ，決してそれを抹殺しない」と美術史の有用性を説いている。

本論は５章から構成されており，イメージ解釈の方法論を紹介した第１章に続き，第２章から最終章までが講義内容，つまり図像解釈学の実践例となっている。以下，各章の内容をまとめて紹介したい。

第１章では，１９世紀後半から２０世紀にかけて確立されたイメージを解釈する３つの方法論の特徴について簡潔に述べている。まず，時代や民族，文化的伝統に大きく影響された特徴を表す様式ごとに作品を分類する様式論が挙げられる。画面構成や色使い，空間表現などヴィジュアルな特徴によって様式を特定し，美術史家によってルネサンス様式，マニエリスム様式，バロック様式などと定義された様式論を学ぶことは，今でも美術史入門の第一歩と位置づけられている。第二の方法論では，作品が制作された理由や意味を探り，人類史のなかに芸術の歴史を関連付ける方法である図像解釈学（イコノロジー）について説明している。最後は，さまざまな原典から特定できるものを選び，図像を読み解いていく方法論である，図像学（イコノグラフィー）を紹介している。

第２章以降には講義内容が収められているが，有名なルネサンス時代の画家の代表的な絵画作品を取り上げ，それらを専門的な知識によって掘り下げていく構成になっている。まずは，ルネサンス期の巨匠ミケランジェロ・ブオナローティが，ローマ法王の命で描いたシスティー

ナ礼拝堂の天井画と主祭壇壁画である。ヴァチカンにおけるシスティーナ礼拝堂の位置づけや，原典である旧・新約聖書についてだけではなく，芸術家の人生に強い影響を与えたフィレンツェの僧侶サヴォナローラの説教などを複合的に解釈すると同時に，１６世紀中期に描かれたこの正面壁画が，どのように宗教改革後の世相を反映しているのかを証明するために，様式比較をおこなっている。

第３章では，レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」に秘められた謎について取り上げている。まず「簡潔，自然らしさ（真実らしさ），全体の均衡と比例，主題の明確な伝達」などの特徴をもつ，ルネサンス古典主義様式の典型であるレオナルドの「最後の晩餐」を，様式比較によって説明し，常に曖昧で多義的な要素が見出だされるレオナルドの作品について，膨大な素描や原稿を紐とくことにより，画家自身が抱いた関心や世界観を明らかにし，資料に基づいた解釈を提示している。そして，ヨーロッパ全体を覆うキリスト教世界観のなかで，無神論者的な作品を描き続けた芸術家レオナルドの，秘められた思想を読み解いている。

第４章では，同時代に異なる文化，異なるイデオロギーの中で活躍した画家の一例として，ドイツの画家アルブレヒト・デューラーの版画「メランコリー」に焦点があてられている。そこではまず，ルネサンスの人間観を理解する上で重要な，多様な宗教以外の概念が挙げられている。たとえば，ヨーロッパで脈々と受け継がれてきた占星術，錬金術，四性論や，古代ギリシャの知識とキリスト教的思想を融合させた新プラントン主義について紹介し，たった一枚の版画に，どれほど重層的な思想が描き込まれているか，また，それを解読するにはいかなる方法論を用いれば良いのかについて示している。

最終章では，現在でもなお定説がなく，多くの謎が残されたままである一枚の絵画作品，ヴェネツィア画家ジョルジョーネが描いた「ラ・テンペスタ（嵐）」について，新しい解釈を打ち出している。本作品は，これまで取り上げてきた作品のような，ある一定の時代に共通する概念を取り込んだ主題ではなく，少人数の人間だけが意味を理解できる複雑で，より個人的な思想を表現した作品であろうと考えられている。錯綜する多種多様な解釈を，丁寧に解説することにより，ある時代までの絵画作品（イメージ）が思想や宗教，哲学や道徳を表すメディアであったことを明らかにしている。

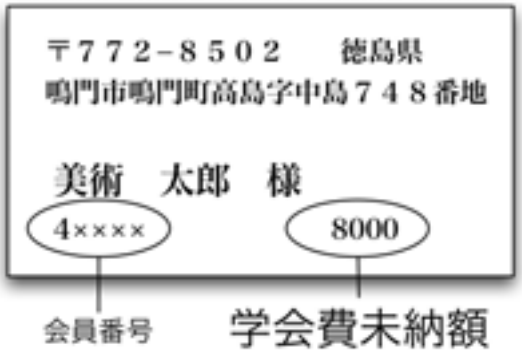
意味解読が複雑かつ困難であるほど，感性中心主義になりがちな西洋美術の鑑賞に対し，若桑氏は「ある時期までは，画家は思想を伝えるためにのみ描いていた」こと，そして「絵を見る行為は，いつでも作者の見た目で，世界を見る行為である」ことを明言している。そして講義内容を言いっ放しにするのではなく，さらに知識を深めることを望む読者に対し，最も重要な参考文献を多数紹介していることも，本書の大きな特徴であると言えるであろう。

西洋絵画を読み解くための基礎となる原典，たとえば聖書やギリシャ神話などの文献は，われわれにとって身近な本とは言えず，簡単に頭に入るものでもない。しかしながら，そのような原典を用いて，絵（イメージ）をどのような方法論で読み解き，いかに解釈することができるのか，という具体的な一例をわかり易く提示している本書は，美術史学を紹介する文献として，大変貴重であると考える。

事務局より

◆学会費の納入の確認のお願い

これまで会費納入状況については，個別に文書にてお知らせしておりましたが，昨年度末より事務局からの郵送物の宛名ラベル右下に明示させて頂くことに致しました。（右図参照）



なお，平成１８年度までの会費が全て納入されている方は“０”になっています。また，次年度分まで会費を振り込んでしまわれている場合には，マイナス表示になります。（例 -8000）

会員の皆様には年度当初の会費納入をお願いしておりますが，平成１７年土以前も含めて会費が未納の方々もいらっしゃいます。各自の納入状況表示をお確かめいただき，まだお振り込み頂いていない方につきましては，早急にお振り込みくださいますようにお願い致します。振り込みにあたっては，郵便局備え付けの青文字の用紙に下記の口座記号番号及び加入者名を記入してご利用ください。

学会費を滞納されておられる場合には，学会発表や論文投稿などができない場合がございます。さらに，学会費を２年分以上滞納なさいますと強制的に大会扱いとなってしまいます。十分ご注意ください。

学会年会費　郵便振込先
口座記号番号：　01610-9-111229　　加入者名：　美術科教育学会

◆住所変更の届け出のお願い

自宅や勤務先に変更があった場合には，すみやかに事務局宛ご連絡ください。一昨年度より，郵送にかかる経費の節減をはかるため，事務局からの送付物は一部のものを除いて宅配業者のメール便を利用しております。そのため，郵便局に転送の手続きをしていただいておりましても，郵送物がお手元にお届けできません。ご面倒ですが，必ず下記宛にファックスまたはメールにて住所変更のご連絡をくださいますようにお願いいたします。

住所変更等の連絡先　Fax：０８８－６８７－６６３６
E-Mail：yyamada@naruto-u.ac.jp
美術科教育学会事務局　会員管理担当　山田　芳明